

## 「キュプリアヌスの疫病」考：古代キリスト教におけるフィランスロピア論のための予備的考察

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 土井 健司   |
| 雑誌名 | 神学研究  |
| 号   | 62  |
| ページ | 25-39   |
| 発行年 | 2015-03-20  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10236/13777">http://hdl.handle.net/10236/13777</a> |

# 「キュプリアヌスの疫病」考

——古代キリスト教におけるフィランスロピア論のための予備的考察

土井 健司

## はじめに

シカゴ大学の歴史学者ウィリアム・マクニールは、『疫病と世界史』という刺激的な書物のなかで、疫病というものが世界史の展開においてどのような役割を果たしたのかを描いている<sup>1</sup>。この本のおもしろさは、厳密な史料分析をとおした実証研究の凄さにはなく、マクニール独特の「マクロ寄生」と「ミクロ寄生」という対概念のもと、疫病という「ミクロ寄生」（病原菌が人間に寄生すること）が歴史に及ぼした事態を世界史規模で考察している点にある。言い換えるなら、独特のグランド・セオリーによって世界史のほぼ全体にわたって論述できている点にある。歴史のおもしろさとは、このような大きな論述にあると痛感できる一書である。

さらにマクニールは3世紀半ばの、いわゆる「キュプリアヌスの疫病」<sup>2</sup>を取り上げ、自分の命を賭してまでなされた病人看護と終末論的希望に基づいた徹底した生の有意味性の二つを当時のキリスト教の特徴とし、続く世紀のキリスト教公認に至る遠因となったことを仄めかしていた<sup>3</sup>。ローマ社会のなかでキリスト教のみがもっていたこうした特徴こそキリスト教の魅力であったのであり、その興隆を説明できるとマクニールは説く。「前代未聞の疫病がもたらす恐怖と精神的衝撃にもこのように対処し得る至高の包容力こそ、ローマ帝国の抑圧された下層民にとってキリスト教が持った魅力の、大きな部分を占めていたのであった」（邦訳202頁）。同様の評価は、マクニールを参照しつつ宗教社会学者のロドニー・スタークも行っており、ローマ帝国におけるキリスト教の興隆を説明する一因と評価することができる<sup>4</sup>。

1 W. H. マクニール著・佐々木昭夫訳『疫病と世界史』上下、中公文庫 2007年（W. H. Mcneil, *Plague and peoples*, Anchor 1977）。

2 マクニールはこの言葉を用いていないが、英語では the plague of Cyprian あるいは the Cyprian plague が見出せる。またドイツ語では die Seuche des hl. Cyprian という表現が G. Sticker, *Abhandlungen aus der Seuchengeschichte und Seuchenlehre* (Giessen 1908, S. 23) に見られる。この不名誉な命名は、もちろん疫病の責任をキュプリアヌスに帰したからではなく、たまたま彼がこの疫病の時期に講話「死を免れないこと」を著したことに起因する。本稿でも論述上の利便性の点からこの用語を踏襲したい。

3 前掲書上巻192頁から202頁。ここではアントニヌス朝下の疫病が合わせて論じられている。

4 R. スターク著・穂田信子訳『キリスト教とローマ帝国』、新教出版社2014年、第4章「疫病・ネットワーク・改宗」。その他この疫病についてはマルセル・サンドライユの『病の文化誌』上巻（リプロ、1984年、131頁）や立川昭二『病気の社会史』（岩波現代文庫、2007年、41頁から44頁）は日本語で

では「キュプリアヌスの疫病」とはどのような出来事だったのか。

たとえば18世紀のイギリスのローマ史家エドワード・ギボンが名著『ローマ帝国衰亡史』（第10章）においてこれを扱っており、次の三点を軸に論じていた。1) この疫病は250年から265年まで続いた。2) ローマでは一日5000人もの人が亡くなった。3) アレクサンドリアでは、疫病前の40歳から70歳までの人口と疫病蔓延中（あるいはその後）の14歳から80歳までの人口とが同数であった。かくしてギボンはこの時代に起こった戦争や飢饉、そして疫病のためローマ帝国の半分の人びとが亡くなったと結論づけていた。この論述の是非はともかくギボンは一体どのような史料にもとづいてこれらを論じたのだろうか。本論考では、残存する史料をもとにこの疫病の実態がどのようなものであったのかを考察し、古代キリスト教におけるフィラソロピア論に資する予備的考察を行いたい。

## 1. 「キュプリアヌスの疫病」を扱う史料群

この疫病を扱う古代、中世の史料は少なくなく、調べた限りで次のような文献が確認できた。当該箇所は大半が数行の文章であるが、以下おおよそ時系列に確認していく。

まずもっとも早いものは258年以前の史料であって、キュプリアヌスの講話「死を免れないこと（*De mortalitate*）」であろう<sup>5</sup>。とくに8章（疫病におけるキリスト者の反応）、14章（症状等）、16章（看病の実践）はこの疫病という出来事を知る上で大事な箇所である。さらにキュプリアヌスの殉教後（258年9月14日）の259年、あるいはその数年内に執筆されたポンティウスの『キュプリアヌスの生涯（*De vita et passione Cypriani*）』（9章）である<sup>6</sup>。さらに261年3月ならびに262年3月と推定されるアレクサンドリア主教ディオニュシオスの復活祭書簡二通（エウセビオス『教会史』第7巻21章から22章に所収）が挙げられる<sup>7</sup>。これら四点は疫病が蔓延する最中、あるいは同時代の史料となる。さらにこの時代に発行された貨幣も参考になるであろう

---

読めるものとして挙げられる。

- 5 M. Simonetti, *Sancti Cypriani de mortalitate*, CCL, III, A, Brepols, 1976, pp15-32. なお Altaner/ Stuibler, *Die Patrologie*, Wien 1978, S.176 では「252年あるいはそれ以降」とされている（S.176）。また次の邦訳を参照した。吉田聖訳「キュプリアヌス 死を免れないことについて」、『中世思想原典集成4 初期ラテン教父』所収、平凡社、1999年。
- 6 今回参照したテキストは、残念ながらネット上にて閲覧できたもののみで、1554年にロンドンで公刊された Johannes Trithemius の校訂のものである。なお他に英訳を参照した。R.J.Defferari (tr.), *Early Christian Biographies*, The Fathers of the Church, The Catholic University of America Press: Washington D.C., 1964.
- 7 H. J. Lawlor/ J.E.L.Oulton, *Eusebius The Ecclesiastical History*, 2vols, LCL, Harvard U.P., 1980. いずれも書簡の一部であるが261年と推定されるものは21章（pp. 178-182）、翌年のものは22章（pp.182-188）に引用され記載されている。

う。

4 世紀に数えられる史料としては、エウセビオスの『年代記 (*Chronicon*)』(ただしギリシア語原文は失われ、380 年頃のヒエロニムスによる加筆を含むラテン語訳が残存<sup>8)</sup>)のオリンピア暦 258 年期の第一年(西暦に換算すると 253 年)の箇所<sup>9)</sup>、また 4 世紀後半のアウレリウス・ヴィクトルの『皇帝たちについて (*De caesaribus*)』30 章、ならびのその簡略版である著者不明の『エピトメ (*Epitome de caesaribus*)』30 章<sup>10)</sup>、エウトロピウスの『ローマ略史』(*Breviarium ab urbe condita*) 第 9 卷 5 章<sup>11)</sup>、また複数著者による『ローマ皇帝群像 (*Historia Augusta*)』所収の「二人のガリエヌス (*Gallieni Duo*)」(伝トレベリウス・ボリオ)の 5 章 21 節が挙げられる<sup>12)</sup>。ヴィクトル、エウトロピウス、「二人のガリエヌス」の著者はいずれもキリスト教とは関わりはない。

さらに 5 世紀、6 世紀のものとしては、418 年と推定されるオロシウス『異教徒に対する歴史 (*Historia adversus paganos*)』第 7 卷 21 章<sup>13)</sup>、そして 502 年頃とされるゾシモス『新ローマ史 (*Historia Nova*)』第 1 卷 26 章と 36 章である<sup>14)</sup>。なお書名にある「新」とは、キリスト教的ローマ史観に対抗するものとして付けられたという<sup>15)</sup>。さらにゴート人の修道士ヨルダネスの『ゴート人の歴史 (*Getica*)』の 104 節ならびに 106 節にこの疫病に関する記述が見出せる<sup>16)</sup>。この本は 551 年に執筆され、カッシオドルスの『ゴート人の歴史 (*De origine actibusque Getarum*)』の縮約版であるが、カッシオドルスのものは残存しない。

さらにビザンツ時代の年代記者などの著作家たちもこの疫病について論述する。7 世紀のアンティオケアのヨハネスの手になる史書の断片 (151 番)<sup>17)</sup>、9 世紀(?)のディオニュシウス・テルマハレンシスのものとされた『年代記』<sup>18)</sup>、10 世紀のシメオ

8 そのためこの文献をエウセビオスのものというより、ヒエロニムスの著作とする見解が有力であるが、この疫病の箇所については校訂者 Helm によってヒエロニムスの加筆部分が明示されている。注 30 を参照。

9 R. Helm(ed.), *Eusebius Werke 7Bd. Die Chronik des Hieronymus*, GCS Eusebius7, Berlin 1984, p. 219.

10 Fr. Pichlmayr (ed.), *Sextus Aurelius Victor de Caesaribus*, Bibliotheca Scriptorum Graecorum et Romanorum Teubneriana, 1993, pp. 75-129. なお『エピトメ』の方は同書 pp. 131-176.

11 C. Santini (ed.), *Eutropii breviarium ab urbe condita*, Bibliotheca Scriptorum Graecorum et Romanorum Teubneriana, 1992, p.58.

12 D. Magie (ed.), *The Scriptores historiae Augustae*, vol.III, LCL, Harvard U.P., 1982, pp. 16-63. なお次の邦訳も参照した。井上文則(訳)、「二人のヴァレリアヌスの生涯」、『ローマ皇帝群像 3』所収、西洋古典叢書、京都大学学術出版会、2009 年。

13 C. Zangemeister (ed.), *Pauli Orosii adversus Paganos*, 1889, p.282.

14 L. Mendelssohn (ed.), *Zosimi Comitis et Exadvocati Fiscii Historia Nova*, Leipzig 1887. なお 26 章は 19 頁、36 章は 26 頁にある。

15 “Zosimos”, *Oxford Dictionary of Byzantium*, vol.3, p. 2231.

16 Theodor Mommsen (ed.), *Iordanes Romana et Getica*, Monumentum Germaniae Historia 5,1, München 1982, S. 84f..

17 TLG 所収のテキストを使用。

18 J.-B.Chabot, *Incerti auctoris chronicon Pseudo-Dionysianum vugo dictum*, CSCO121, Louvain 1949, p. 108.

ン・ロゴテテスの『年代記 (*Chronicon*)』77章<sup>19</sup>、および修道士ゲオルギオス・ハマルトロスの『年代記 (*Chronicon*)』37章<sup>20</sup>、さらに11世紀となると1058年のゲオルギオス・ケドレノスの『歴史綱要 (*Historiarum Compendium*)』<sup>21</sup>、そして12世紀のヨハネス・ゾナラスの『歴史略要 (*Epitome Historiarum*)』第12巻21章<sup>22</sup>が挙げられる。最後にもうひとつ12世紀のものと推定される『年代記 (*Chronographia*)』(文法学者レオの名で伝わる)にもこの疫病の記事を見出すことができるが<sup>23</sup>、この書の記述は同じく「レオ」の名を用いたというシメオン・ロゴテテスの『年代記 (*Chronicon*)』77章のものを転載したものであり、一字一句同一である。ビザンツ時代の史料は、もちろん異なる部分もあるが、共通する部分も多く、何か共通の伝承があったとも考えられる<sup>24</sup>。

以上、十九の史料がこの疫病を扱っているが、当然それぞれの史料で異同が見られる。たとえばギボンは15年間この疫病は蔓延したとし、それはここに挙げた或る史料の記すところであるが、別の史料には11年とするものもある。実は何年続いたのかについては、同時代にあたる4世紀、また4世紀の史料には明言されておらず、ビザンツ時代の著作家の文献に散見される。こうした異同を含め、一体この疫病はいかなるものであったのかを次節以降で考察していきたい。

## 2. 疫病の起源と期間

この疫病はいつから始まったのだろうか。史料によると251年のガルス帝の登位後しばらくして疫病が起こったようである<sup>25</sup>。まずはエウトロピウスの史料を見てみよう。

「ただ疫病によって、すなわち病気と苦痛によって知られたのが、彼らの元首政で

19 TLG 所収のテキストを使用。

20 C. de Boor (ed.)/ P. Wirth, *Georgii Monachi Chronicon*, 2vols., Teubner 1978, vol2, p. 465f.

21 I. Bekker (ed.), *Georgius Cedrenus Ioannis Scylitazae ope*, 2 tomi, CSHB vol.34, Bonn 1838, p.452.

22 TLG 所収のテキストを使用。

23 I. Bekker, *Leonis grammatici Chronographia*, CSHB vol.47, Bonn 1842, p.77.

24 T. M. Banchich and E. N. Lane (tr.) and T. M. Banchich (comm.), *The History of ZONARAS*, Routledge: London/ NewYork, 2009, p. 101, n. 52.

25 この疫病の時期のローマ皇帝の在位について、以下確認しておきたい。キリスト教迫害を実施したデキウス帝が251年6月に対ゴート戦争において亡くなると、代わってガルス帝が6月に登位する。ガルス帝は最初デキウス帝の息子ホスティリアヌスを共治帝とするが、しばらくして疫病で亡くなったので、息子のヴォルシアヌスを共治帝とする。しかし253年8月に両者とも殺害され、アエミリウス・アエミリアヌスが帝位を継ぐが、その政権は8月から10月までの短命に終わった。後を継いだのがヴァレリアヌス帝(253年10月)であり、彼は息子ガリエヌスを共治帝とする。当初キリスト教に寛容であったヴァレリアヌスはまもなく翻意しキリスト教迫害者として有名になるが、260年6月にペルシャ戦役にて敗れ、ササン朝ペルシャのシャプール一世に捕縛され、ペルシャの地で奴隷となった。そのためガリエヌス帝は260年6月以降単独の皇帝として268年9月まで統治した。疫病はこれらの皇帝の時代に蔓延したという。

あった。」(Sola pestilentia et morbis atque aegritudinibus notus eorum principatus fuit.)

「彼ら」というのはガルス帝とヴォルシアヌス帝のことであって、その治世は疫病によってのみ知られているという。またヴィクトルの記事には次のように記されている。

「その後<sup>26</sup> 疫病が起こった。それがいっそうひどく荒れ狂う最中ホスティリアヌスは亡くなった。ガルスとヴォルシアヌスはあらゆる貧者の埋葬を入念にかつ根気よく行ったので人気を博した。」(Dein pestilentia oritur; qua atrocious saeviente Hostilianus interiit, Gallo Volusianoque favor quaesitus, quod anxie studioseque tenuissimi cuiusque exsequias curarent.)

さらに『エピトメ』にはこう記されている。

「ヴィヴィウス・ガルスは息子ヴォルシアヌスと共に二年間統治した。この時期にホスティリアヌス・ペルペンナは元老院から皇帝に選ばれ、その後間もなく疫病によって亡くなった。」(Vivius Gallus cum Volusiano filio imoeraverunt annos duos. Horum temporibus Hostilianus Perpenna a senatu imperator creatus, nec multo post pestilentia consumptus est.)

デキウス帝が 251 年 6 月に対ゴート戦争において戦死すると、ガルスが帝位に就く。疫病はその後に起こったと考えられる。さらにデキウスの息子でガルス帝の共治帝であったホスティリアヌスが「その後間もなく」(nec multo post) この疫病で亡くなったという。こうしてガルス帝は、息子ヴォルシアヌスを共治帝とするのであり、251 年 6 月から数か月後のことと考えられる<sup>27</sup>。するとこの疫病は 251 年 7 月あるいは 8 月にはじまったと考えられが、ここでは翌月の 7 月ではなく、8 月としておきたい。さらにホスティリアヌスはローマにおいて亡くなったと考えられるので、疫病はすでにローマで確認されることになる。さらにヴィクトルの史料にしか見られないが、ガルス帝とヴォルシアヌス帝はローマの町に溢れる疫病で亡くなった貧者を埋葬し、人びとから感謝されたという。その目的は感染防止であったと考えられる。この疫病によってガルス帝とヴォルシアヌス帝が知られるということは、その時期に疫病がはじまり蔓延していったからと考えられる。さらにこの点については、6 世紀のヨルダネスもそのように記している。「デキウスが亡くなるとガルスとヴォルシアヌスがローマ人の国を領有した。そしてその頃に疫病も——この[死という]必然に酷似し、われわれも 9 年前に経験したものであるが——全地を汚した。しかしとくにアレクサンドリアとエジプト全土を荒廃させた。この災害については史家ディオニュシオ

26 「その後」(dein) とは、元老院によってガルスとホスティリアヌスが正帝 (Augustus) に、ヴォルシアヌスが副帝 (Caesar) に任命された後、という意味。

27 なお Bird はホスティリアヌスの死を 251 年 8 月あるいは 9 月と推定する (H. W. Bird (tr.), *Aurelius Victor De Caesaribus*, Liverpool U.P., 1994, p.131, n.1)。

スが涙をもって語っており、またわれわれの尊敬すべきキリストの殉教者にして司教であるキュプリアヌスが『死を免れないこと』という題の本の中で書いている<sup>28</sup>（『ゴート人の歴史』104節）。アレクサンドリアの主教ディオニュシオスを「史家」とする誤解はおもしろいが、ガルス帝とヴォルシアヌス帝の時代に疫病が流行りはじめたのは確かであろう<sup>29</sup>。

なお251年というのは、オリンピア暦258年期の第一年（西暦253年）とするエウセビオスの『年代記』の年代とは異なる<sup>30</sup>。エウセビオスはガルス帝とヴォルシアヌス帝の登位をオリンピア暦257年期の最終年（西暦252年）とし、疫病の流行を翌年に位置づけるので、253年となる。しかしガルス帝とヴォルシアヌス帝の治世期に疫病が蔓延したことに変わりなく、ここではガルス帝の即位直後と考えて、251年8月より疫病は流行しはじめたものとする。

この疫病は251年8月以降にキュプリアヌスの教区であるカルタゴをも襲い、その流行する最中に彼は講話「死を免れないこと」を教区に向かって語った。ポンティウスの『キュプリアヌスの生涯』9章ではこの疫病の様子が語られるが、その筆致の特徴のひとつは動詞の時制に未完了（*flagitabant, lacebant, etc.*）、完了形（*erupit, invasit, etc.*）が用いられていることである。故人となったキュプリアヌスのことを語るものとは言え、その時点でカルタゴでは疫病が終息していたと見ることができる。

ところでこの時代の貨幣を見てみると、「健康をもたらすアポロン神に」（*Apoll. Salutari*）と裏面に記し、豎琴と小枝をもつ医神アポロン像を刻印したものが数点見られるのが特徴だと言える<sup>31</sup>。ギリシアの医神アポロンに祈願するのは疫病の終息で

28 *Defuncto tunc Decio Gallus et Volusianus regnum potiti sunt Romanorum, quando et pestilens morbus, pene istius necessitate consimilis, quod nos ante has novem annos experti sumus, faciem totius orbis foedavit, supra modum tamen Alexandriam totiusque Aegypti loca devastans, Dionysio storico super hanc cladem lacrimaviliter exponent, quod et noster conscribit venerabilis martyr Christi et episcopus Cyprianus in libro, cuius titulus est de mortalitate.*

29 なお同書106節には次のように記されている。「先述したガルスとヴォルシアヌス両帝はかろうじて二年帝位を保ったが、この世から旅立った。とは言えその二年は至るところ平和と好感をもたれたものであった。ただ一つのこと、すなわち広範囲に広がった疫病は彼らの不幸に数えられている。とは言え他人の人生を悪口でののしるのを常とする事情を知らない讒言者によってそうなっているのである」（*supra dicti vero Gallus et Volusianus imperatores, quamvis vix biennium in imperio perseverantes ab hac luce migrarunt, tamen ipsud biennium, quod affuerunt, ubique pacati, ubique regunaverunt gratiosi, praeter quod unum eorum fortunae reputatum est, id est generalis morbus, sed hoc ab imperitis et calumnoatoribus, qui vitam solent aliorum dente maledico lacerare.*）。エウトロピウスがやや皮肉を込めて記したことについてヨルダネスは批判的であり、ガルス帝とヴォルシアヌス帝に好意的である。

30 『年代記』の記事は次の通り。“CCLVIII. Olymp. a. Pestilens morbus multas totius orbis provincias occupavit maximeque Alexandriam et Aegyptum, ut scribit Dionysius et Cypriani de mortalitate testis est liber.”（オリンピア暦258年、a、疫病が全世界の多くの州を襲った。最もひどかったのはアレクサンドリアとエジプトであった。このことはディオニュシオスが書き、またキュプリアヌスの「死を免れないこと」の書が証している通りである）。この中で「このことはディオニュシオスが書き、またキュプリアヌスの『死を免れないこと』の書が証している通りである」の箇所はヒエロニムスの加筆と考えられる。

31 H. Mattingly/ E. A. Sydenham/ C. H. V. Sutherland, *The Roman Imperial Coinage*, vol.4, part 3, London 1949; H. Mattingly/ E. A. Sydenham, *The Roman Imperial Coinage*, vol. 5, part.1, London 1927.

あり、感染しないこと、ならびに疫病からの回復、健康であったと思われる<sup>32</sup>。この刻印のある貨幣の発行は、ガルス帝の下でアウレウス金貨二点（図版参照）、アントニアヌス銀貨一点、銅貨二点、ヴォルシアヌス帝下ではアントニアヌス銀貨一点、銅貨二点、またアエミアヌス帝下でアントニアヌス銀貨一点、さらにヴァレリアヌス帝下のアントニアヌス銀貨一点を確認することができる。ガルス帝とヴォルシアヌス帝下のものは 251 年から 253 年、アエミアヌス帝下のものは 253 年、さらにヴァレリアヌス帝下のものは 256 年から 57 年の間のものと見なされている<sup>33</sup>。いずれも発行場所はローマと推定される。こうした貨幣の発行は、少なくともガルス帝とヴォルシアヌス帝下、アエミアヌス帝下、そしてヴァレリアヌス帝下でローマの中で疫病が流行していたことを示すものであろう。

さらに 502 年頃のものであるが、ゾシモスの『新ローマ史』第 1 巻 36 章にヴァレリアヌスのベルシャ遠征軍が疫病で壊滅的な打撃を蒙り、その隙をシャープール一世に突かれ敗北したとの記述がある。ヴァレリアヌスの敗北は 260 年 6 月のことであり、この時点でもなお疫病が終息していなかったことを示している<sup>34</sup>。またエウセビオスの伝えるアレクサンドリアのディオニュシオスの復活祭書簡は 261 年 3 月と 262 年 3 月のものと推定されるが、アレクサンドリアではこの時期に疫病が蔓延したことを示している。

この時代の経緯について、エウセビオスの『教会史』第 7 巻は次のように記している。デキウス帝の後ガルスが帝位を継ぐが、「デキウスの過ちを理解せず・・・自分の目の前に置かれた同じその石に躓きました」(1 章)<sup>35</sup>。しかしガルス帝の後を継いだヴァレリアヌス帝について（アミアヌス帝に言及はない）「そしてとくに彼のはじめの頃の行動は注目するかもしれません。彼が神の人びとに対して非常に穏やかで友好的だったからです」(10 章)と述べている。しかしその平和も東の間のものであり、ヴァレリアヌスはキリスト教迫害に踏み切る。ディオニュシオスは捕えられ、ケフロという町に追放されたという (11 章)。しかしヴァレリアヌスがベルシャ帝国に捕えられると、ガリエヌス帝が単独で統治するようになり、キリスト教迫害も終息する (13 章)。そこで 21 章には次のように記される。「平和がほとんど現実のものとなったとき、彼（＝ディオニュシオス）はアレクサンドリアに帰って行った」。これが

## アウレウス金貨



ガルス帝(表) アポロン像(裏)

32 「Apoll.Salutari とは直接疫病に言及したものであって、251 年秋に発行されたものに違いない」(The Roman Imperial Coinage, vol. 4, part 3, p. 154)。

33 なおガリエヌス以降の皇帝が発行した貨幣にこの銘が刻まれたものは確認されない。

34 疫病はベルシャ軍では蔓延していないことを考慮すると、ベルシャ側から到来したのではなく、ローマ側からと考えられる。

35 引用は、秦剛平訳『エウセビオス「教会史」』下（講談社学術文庫、2010 年）を用いた。



260年6月以降のことになる。そして、同じ21章では続いて復活祭書簡の引用となるわけで、この書簡は261年3月のものと推定される。アレクサンドリアでは町を二分する内乱が起こっていたが、その内乱の最中あるいはその後に疫病が生じたという。これが最初の書簡である。最初の復活祭書簡の引用された部分の内容は、1) 疫病の原因は多数の死者の血で海が腐り、その腐敗によって生じた疫病が風に乗って広がったこと、2) 疫病以前の40歳から70歳までの人口は、疫病がはじまった後の14歳から80歳までの人口より多かったということ、3) 次々に人が亡くなり若者が死に怯えた結果、生きる気力を失い無感覚になってしまったこと、以上三点に要約できる。

次に引用される復活祭書簡についてエウセビオスは、「再び」(ἀὐθις)と記しており、最初の書簡の後に記されたこと、そのため最短で翌年262年のものと推定される。まず、余りの死者の多さに復活祭を祝う状況にないことを記し、時系列に出来事を整理している。それによると、まず迫害が起こり(おそらくヴァレリアヌスの迫害)、つづいて内乱と飢饉(260年6月以降)が起こるが、一旦落ち着いた頃に疫病が生じたという。「しかし私たちと彼ら(=異教徒)が束の間の休息を得ていたときこの疫病が襲ったのです」(βλαχυτάτης δὲ ἡμῶν τε καὶ αὐτῶν τυχόντων ἀναπνοῆς, ἐπικατέσκηψεν ἡ νόσος αὕτη)。内乱と飢饉は数か月のものであったとすると、260年の秋あるいは冬から疫病が蔓延し、大勢の住民を死に至らしめて行った。これが261年に終息せず、結局262年の復活祭の時期になっても終わらなかったのであろう。この間に疫病が一旦終息したとは記されていない。ディオニュシオスの書簡からわかれわれは、アレクサンドリアでは260年秋あたりから262年3月頃まで一年半にわたって疫病が蔓延していたと推定できる。以上の史料からこの疫病は、251年7月以降にローマではじまり、各地で流行し、その後アレクサンドリアで262年夏まで流行し、少なくとも合計11年間ローマ帝国の各地で蔓延していたということになる。エウセビオスの引用するディオニュシオスの書簡は、この後疫病感染者に対する異教徒とキリスト者の行動の対比を行い、キリスト者が自分の生命を賭して看病に努めたことを記す。

また262年の時点でアレクサンドリアだけでなく、ローマなどでも疫病が流行していたことは『ローマ皇帝群像』所収の「二人のガリエヌス」に見られる史料において確認される(5章5節)<sup>36</sup>。ガリエヌスの統治時代、それもファウシアヌスがコンスルの時、即ち262年に地震が起こったが、疫病も猛威を振るっていたと記されている。「そして疫病もローマとアカイアの諸都市においてとても激しく、一日で5000人が同じ

36 なお『ローマ皇帝群像 (Historia Augusta)』では、ガルス帝やヴォルシアヌス帝、ヴァレリウス帝の記録が欠けており、これらの皇帝の時代の疫病について不明となっている。

病気によって亡くなった。・・・さまざまな所から来た疫病がローマ世界を荒廃させた」(nam et pestilentia tanta exstiterat vel Romae vel in Achaicis urbibus, ut uno die quinque milia hominum pari morbo perirent.・・・ex diversis partibus pestilentia orbem Romanam vastaret)。疫病が流行した場所として、ここではローマに加えてアカイア、即ちギリシアが挙げられているのが特徴である。それにしてもローマでは 251 年から 11 年間も連続して疫病が流行していたのであろうか。「さまざまな所から」疫病が来たのであれば、この疫病は流行地を転々と移動していたようであって、様々な地域から多く人びとが訪れる首都ローマは何度も疫病に襲われたと考えられる。

### 3. ビザンツ時代の史料の描く「キュプリアヌスの疫病」

さて前節の議論は、7 世紀のアンティオケアのヨハネスの断片、9 世紀(?)の偽ディオニュシウス・テルマハレンシスの『年代記』、10 世紀のシメオン・ロゴテテスの『年代記』77 章、修道士ゲオルギオス・ハマルトロスの『年代記』37 章、さらに 11 世紀のゲオルギオス・ケドレノスの『歴史綱要』、12 世紀のヨハネス・ゾナラスの『歴史略要』第 12 卷 21 章といったビザンツ時代の六つの史料といささか異なるものとなっている。そこでビザンツ時代の史料について考察を加えておきたい。

まずもっとも早いものと考えられるアンティオケアのヨハネスの史料は、次のように記している。

「ガルスが統治しているとき、疫病が 15 年間流行した。エチオピアから西方へと移って行き、衣服あるいはただ見るだけで感染した。」(Γάλλυς βασιλεύσαντος, ἰέ' ἔτη ἐκράτησε λοιμὸς, κινηθεὶς ἀπὸ Αἰθιοπίας ἕως τῆς δύσεως, μετεδίδοτο δὲ ἀπὸ ἱματίων καὶ ψιλῆς θέας.)

ヨハネスの史料によると、a) ガルス帝の頃に疫病が流行した(流行の開始)、b) 15 年間流行した(流行期間)、c) エチオピアから西方へと移っていった(移動経路)、d) 衣服あるいは見るだけで感染した(感染方法)について記載されている。しかし前節で考察した史料にはヨハネスの史料に見られる b)、c)、d) といったことについて直接のない。全体的にビザンツ時代の史料は五世紀までの史料の解釈が含まれ、解釈が加わることで新しい記述も見出される。

偽ディオニュシウス・テルマハレンシスの『年代記』では、a) ガルス帝とヴォルシアヌス帝の第二年に疫病が生じた、e) 全地を荒廃させ、とくにアレクサンドリアとエジプトでひどかった(流行範囲)、さらに埋葬について話が深められ、j) 異教徒は患者と遺体を放っておいたが、k) キリスト者は埋葬に腐心した、と記事は進む。

さらにシメオン・ロゴテテスの記事では、a) ガルスとヴォルシアヌスの時代に疫

病が起こった（流行の開始）、b) 11年間猛威を振るった（秋にはじまって冬に終わった）（流行期間）、c) 東から西に移動した（移動経路）、d) 衣服あるいは見るだけで感染した（感染方法）、e) 疫病から免れた町はひとつとしてなかった（流行範囲）、以上の記述が見られる。

さらに皇帝アレクシオス1世の高官であり、1118年以降に『年代記』を執筆したヨハネス・ゾナラスでは、a) ガルス・ヴォルシアヌス（同一人物とする）の時代に疫病が起こった、b) 15年間続いた、c) エチオピアからはじまった、e) 東西ほとんど全土に拡がった（流行範囲）、これらが記されている。

以上年代記的な記述であるためか、流行の開始、期間、移動経路、感染方法、流行範囲といった点に記述が集中している。

異色の記述になっているのはゲオルギオス・ハマルトロスとゲオルギオス・ケドレノスの記事である。また両者は関連しており、ケドレノスの記事の一部はハマルトロスの記事の転載となっている。ハマルトロスの記事は、疫病がヴァレリアヌス帝の時期にはじまったとする。そして疫病とキリスト教迫害を結びつけて、g) 迫害に対する神の怒りが疫病の原因だという（迫害との関連性）<sup>37</sup>。続くところでは、h) 海からの蒸気と風によって疫病が蔓延した（疫病蔓延の原因）、i) 大地を襲い、死者のいない家はないほど多大な被害をもたらした（被害の程度）、j) 異教徒は病人を捨て、遺体は埋葬されないまま放置された（異教徒の態度）、k) キリスト者は病人の世話をを行い、疫病で亡くなっていった（キリスト者の態度）、以上の事柄が論じられている。

ハマルトロスの記事は全体として明らかにディオニュシオスの復活祭書簡に依存している。すなわちgを除き、hからkまですべてディオニュシオスの書簡に見られるものである。

さらにケドレノスは、まずヴァレリアヌス帝の時代に疫病が流行したとし、ハマルトロスの記事を一部ほぼそのまま転載する（g、h、iの一部）。さらに続けて、これまでの史料に見られた疫病の開始、すなわちa) ガルス帝とヴォルシアヌス帝の時代にも疫病が流行した（ただしこの両帝はヴァレリウス帝の後を継いだという）、b) 15年間続いた（秋にはじまって冬に終わった）（疫病期間）、c) エチオピアから西方へと移動した（移動経路）、d) 衣服あるいは見るだけで感染した（感染方法）、e) 疫病を免れた町はなかった（流行範囲）、多くの町は二度流行したという記事が続いている、

ケドレノスは、ハマルトロスとディオニュシオスの書簡の影響を受け（g、h、iの一部）、ヴァレリウス帝の後をガルス帝とヴォルシアヌス帝が継いだという誤解を抱

37 疫病を迫害と結びつけ、神の怒りのゆえ疫病が起こったというのは、興味深いことに、5世紀のオロシウスの『異教徒に対する歴史』第7巻21章5節においてはじめて見出される。

くことになったものと思われる。また迫害との関連性 (g)、異教徒の態度 (j)、キリスト者の態度 (k) は明確にキリスト教的モチーフが働いたものになっている。しかし、流行の開始 (a)、期間 (b)、移動経路 (c)、感染方法 (d)、流行の範囲 (e) についてはハマルトロスの記事には欠けているが、他の著作家との共通点が見られる。

以上これらビザンツ時代の著作家の記事について整理してみたい。まず流行の開始 (a) について、ハマルトロスを除いて問題はない。いずれもガルス帝の時代を挙げている。しかし期間 (b) については、11 年説と 15 年説が見られるが、15 年説は根拠が不明に止まる。最初に 15 年説に言及したアンティオケアのヨハネスはガルス帝の統治期間が 15 年であるかのような誤解をもっていたように見える。いずれにせよ 262 年以降に疫病が流行したという史料が見出せない以上、先述したように 11 年説をとりたい<sup>38</sup>。なお秋からはじまって冬に終息したというのは、この疫病が流行性感冒か何かとの理解であろうが、251 年 8 月に疫病が生じたことと合致せず、後代の解釈と見なしてよいであろう。さらに移動経路 (c) についても、もしエチオピアあるいは東方からはじまったのであれば、ローマに達するのにしばしの時間が必要であり、251 年以前に疫病が流行していなければならない。しかし史料はガルス帝の時代にローマで疫病が広がっていることを述べ、それが最初であるかのように記す。アレクサンドリアやエジプトにおける疫病の史料は 261 年と 262 年のディオニュシオスのもの以外にはない。おそらくディオニュシオスの復活祭書簡の影響が大きく、東方から蔓延したという説になったものと考えられる<sup>39</sup>。感染方法 (d) についてはビザンツ時代にはじめて見られるものであって、おそらく流行の範囲、大きさからの推測、解釈と考えると問題はないであろう。最後に流行の範囲 (e) は大半が 4 世紀の史料に遡るが、解釈、たとえば多くの町は「二度」(δύο) 疫病に襲われたというケドレノスに確認されるような解釈も見られる。以上ビザンツ時代の史料は総じて二次的なものと思なしてよいと思われる。

#### 4. 疫病の症状と流行の範囲、程度

そもそもこの疫病は何であったのか。残念ながらこの点については不明に止まる。

38 なお注 4 で挙げたサンドライユは、253 年にはじまり、270 年に終息したとする (『病の文化誌』上巻、131 頁)。253 年はエウセビオスの『年代記』にあるオリンピア暦によると考えられる。また 270 年の終息はクラウディウス・ゴティクス帝が疫病で亡くなったことによる (『ローマ皇帝群像』所収「神君クラウディウス」12 章)。しかし同時代の史料としては 262 年 3 月のディオニュシオスの復活祭書簡が最後のものであって、クラウディウス・ゴティクス帝の死まで 8 年ほど間が空き、この間にこの疫病が流行していたことを示す史料はない。こうした史料の間隙を考えると、この疫病はすでに終息し、クラウディウス・ゴティクス帝は別の疫病で亡くなったと考えたい。

39 ちなみに紀元前 4 世紀の「アテナイの疫病」のときにも、疫病はエチオピアから来たとされている (トゥキュディデス『歴史』第 2 巻 48 章)。このトゥキュディデスの影響も考えられる。

ただ症状について、唯一キュプリアヌスの講話「死を免れないこと」14章に次のような記述が見られる。

「胃腸の解き放たれた流出が身体の力を洗い流し、咽頭において骨の髄にまで達するほどの内熱が裂傷を作るまで焼き、たえまない嘔吐によって腸が痛めつけられ、血液の力で両眼が燃え、病気による腐敗に犯されて脚あるいは他の四肢の一部が区切られ、突然力が失せ身体が損傷して歩行不能になり、聴力がなくなり、眼が見えなくなる、これらは信仰の証に資するのである。」<sup>40</sup>

つまり下痢と脱水、重篤な咽頭炎、嘔吐、眼の充血、四肢の壊死、歩行不能、聴覚と視覚の喪失、これらがキュプリアヌスの見たこの疫病の症状であった。これらがひとつの病気の種々の症状であったのかどうかは不明にとどまるが、今は疑う理由がなく、これらの症状を総合した病気だったと見ておきたい。ただしこれらすべてに該当する病気はなく、麻疹や天然痘とも推定されることもあるが、どのような疫病であったのか一致した見解があるわけではない<sup>41</sup>。

では、この疫病はローマ帝国のいずれの地域で流行したのだろうか。これについて史料が一致するのは、ローマ帝国の全土あるいはほぼ帝国の全域であったということである。同時代の史料は自分の経験する所に限定して語るが、カルタゴとアレクサンドリアは確実であろう。またローマ、そしてギリシアも流行した地域として名が挙げられていた<sup>42</sup>。オロシウスは「ローマのほとんどの属州、すべての町、すべての家が広範囲に拡がった疫病によって破壊され、空にならないところはなかった」(nulla fere provincia Romana, nulla civitas, nulla domus fuit quae non illa generali pestilentia correpta atque vacuata sit) と述べる。さらにゾシモスは『新ローマ史』第1巻26章で次のように記す。

「いたるところから、彼らにのしかかってきた戦争と同様に、疫病がさまざまな都市や村を襲い、人類が残っていたとしてもこれを破壊した。実にこれ以前の数世紀の

40 Hoc quod nunc corporis vires solutus in fluxum venter euiscerat, quod in faucium vulnera conceptus medullitus ignis exaestuat, quod adsiduo vomitu intestina quatuntur, quod oculi vi sanguinis inardescunt, quod quorundam vel pedes vel aliquae membrorum partes contagio morbidae putredinis amputantur, quod per jacturas et damna corporum prorumpente languor vel debilitatur incessus vel auditus obstruitur vel caecatur aspectus, ad documentum proficit fidei.

41 たとえば Sticker は天然痘とする (*Seuchengeschichte und Seuchenlehre*, S. 23)。なおマクニールも麻疹と天然痘の両方が持続的に到来したものとしている (『疫病と世界史』上巻、193頁)。しかし英訳者の M.H.Mahoney はこの行に注を施し、「疫病の症状に関する生き生きとした記述にもかかわらず、この疫病自身は現代に知られているいかなる病気とも同定され得ないとすべきである」と言う (R. J. Deferrairi et alii(tr.), *Saint Cyprian Treatises*, The Fathers of the church, The Catholic University of America Press, 1958, p. 210)

42 エウセビオスの『年代記』では「全ローマ世界の多くの州」(multas totius orbis provincias) と述べられ、『ローマ皇帝群像』の「二人のガリエヌス」では「ローマとアカイアの諸都市でとても激しく」(tanta vel Romae vel in Achaicis urbibus) とされていた。

中でこれほど人びとの損失を出したことはなかった。<sup>43]</sup>

とくにアレクサンドリアが酷かったというエウセビオスの『年代記』の記述は、まだ疫病が人びとの記憶に刻まれていた時代の人物の証言として一定の信憑性が認められるが、それでもディオニュシオスの復活祭書簡の記述の影響が考えられる。アレクサンドリアも酷い状況であったが、アレクサンドリアだけではなく、少なくともローマでも、疫病が猛威を振るった最盛期<sup>44</sup>には一日 5000 人が亡くなったという。またディオニュシオスの伝える数字、すなわち疫病以前の 40 歳から 70 歳までの人口は、疫病がはじまった後の 14 歳から 80 歳までの人口より多かったということが真実であれば、疫病以前の 30 年間の年齢幅の範囲に入る人口が、疫病後の 66 年間の年齢幅の範囲に入る人口を上回るのであって、単純に計算すればアレクサンドリアではほぼ半数の人が亡くなったということになる。

以上の考察によって「キュプリアヌスの疫病」とはどのような出来事であったのかについて、次のようにまとめることができる。

251 年 6 月にガルス帝が即位すると間もなく、7 月あるいは 8 月にこの疫病は流行しはじめた。恐らくローマ帝国の人びとには未知の病気であった。共治帝であったホスティリアヌスはローマにおいてこの疫病に倒れた。ガルス帝は疫病終息の祈願を込めて貨幣を鑄造する一方で、疫病で亡くなった貧者の埋葬を行い、人びとの人気を得た。253 年にガルス帝とヴォルシアヌス帝が殺害されるとアメリアヌス帝が即位するが、疫病はまだ終息していない。同年アメリアヌス帝はヴァレリアヌスに倒され、ヴァレリアヌスが帝位を継ぎ、息子のガリエヌスを共治帝とする。疫病は終息することなく、病氣平癒を願った貨幣の鑄造が続けられる。また疫病はカルタゴでも流行し、その最中司教キュプリアヌスは講話「死を免れないこと」を信徒の前で語り、死を恐れず、希望と共に看病に励むよう促した。259 年頃キュプリアヌスの執事であったポンティウスが『キュプリアヌスの生涯』を執筆し、疫病についても書く。この時点でカルタゴでは疫病は（一旦は）終息していたのかもしれない。しかし疫病はすでに全帝国規模で流行しており、また 260 年になってもローマでは未だ完全に終息していなかった可能性がある。260 年 6 月ヴァレリアヌス帝はペルシャ遠征においてシャープール一世に敗れるが、それはローマ軍がすでに疫病によって酷い打撃を受けていたためだという。261 年 3 月アレクサンドリアの主教ディオニュシオスは復活祭書簡を記し、疫病について書く。260 年冬にアレクサンドリアでは疫病が蔓延し、翌 61 年 3

43 Οὐχ ἦττον δὲ τοῦ πανταχόθεν ἐπιβρίσαντος πολέμου καὶ ὁ λοιμὸς πολεσίν τε καὶ κώμαις ἐπιγενόμενος, εἴ τι λελοιμμένον ἦν ἀνθρώπειον γένος, διέφθειρεν, οὕτω πρότερον ἐν τοῖς φθάσαι χρόνοις τασαύτην ἀνθρώπων ἀπώλειαν ἐργασάμενος.

44 「二人のガリエヌス」5 章 5 節を参照。なお「最盛期」と断ったのは、本当に一日 5000 人が亡くなったとして、それが毎日毎日続いたのであれば、数か月でローマには文字通り一人もいなくなり、空になったことになる。

月までに大量の死者を出す。しかしこの疫病はまだ終息しなかった。62年3月ふたたびディオニュシオスは復活祭書簡を出し、疫病について記す。また262年にはローマやギリシアでも疫病の被害はなお甚大であったようである。その後この疫病についての史料は見当たらず、人びとに免疫力がついたのか、疫病の流行はようやく終息したものと考えられる。およそ11年間ローマ帝国各地を断続的に流行し、各都市は何度か同じ疫病に襲われたものと思われる<sup>45</sup>。疫病の正体は不明に止まるが、その症状は下痢と脱水、重篤な咽頭炎、嘔吐、眼の充血、四肢の壊死、歩行不能、聴覚と視覚の喪失を伴うものであった。おそらく死者は最大で半数近くいたと思われるが、これはディオニュシオスの最初の復活祭書簡から推測できる。当時キリスト者はこうしたなか看病に努め、時に亡くなっていったのであった。これは特にカルタゴとアレクサンドリアについて確認することができる。

## むすびに代えて

最後に、疫病とキリスト教の関係について史料から考えるべき点を二つ挙げて、今後の考察につなげたい。

疫病の蔓延とキリスト教迫害を結びつける見解は、5世紀のオロシウスの文献にはじめて登場する。オロシウスは迫害が行われた場所で疫病が流行したとまで書いている。しかし同時代のキュプリアヌス、ポンティウス、ディオニュシオスの史料には、そのような発言はまったく見られない。迫害に対する神の怒りの故に疫病が起こったという天罰的疫病観は、3世紀の史料には見られない。むしろ反対にキリスト教の故に神々の怒りが下り、疫病が流行したという見解は異教側に見出される<sup>46</sup>。キリスト教側の天罰説は後代の作り物であって、疫病と同時代のキリスト者にとって疫病の原因は問題にはなっていない。キュプリアヌスやポンティウスの文献に見られるように、むしろ疫病という現実を見つめて、それでも他者と関わっていくこと、自分の将来を見据えることが大事だと言う。これはさらに考察を深めねばならない事柄であると思われる。

第二は、疫病の流行期におけるキリスト者の態度、行動についてである。ポンティウスもディオニュシオスの二通目の復活祭書簡も疫病の流行期における異教徒とキリスト者との対比を行う。単純化して言えば、異教徒は病人を見捨てたが、キリスト者

45 たとえばトゥキュディデス『歴史』には、アテナイで同じ疫病が二度流行したとする記事がある（第3巻87章）。

46 ディオクレティアヌス帝の迫害期に著された、シッカのアルノビウスの『諸国民に対して（Adversus nationes）』第一巻では、疫病、旱魃、戦争、飢饉がキリスト教の故に生じたという異教側の批判、非難があり、これに対する反論弁明が記されている。また古くはホメロスの『イリアス』を繙けば、冒頭アポロン神の怒りによって悪疫が生じたとある。

は看病に努め、生命を犠牲にすることもままあったという。またキュプリアヌスも看病を勧め、決して病人を見捨てないようにと説いていた。さらにキュプリアヌスもディオニュシオスも共に看病の結果亡くなったキリスト者を殉教者と見なしていた。生命を賭すことを可能にしたのがキリスト教の終末思想であり、この世の生の終りは決して人生の終りではないというものである。しかしそこまでしてなおも看病に努めた原動力は何であるのか。ディオニュシオスはこれを「兄弟愛」(φιλαδελφία)と述べている。これを「人間愛」(φιλανθρωπία)と言い換えることは可能と考えるが<sup>47</sup>、それにしても、なぜそこまで愛に拘ったのか。一体古代キリスト教においてフィランスロピア(人間愛)、フィラデルフィア(兄弟愛)とは何であったのか。この点を中心に「キュプリアヌスの疫病」とキリスト教については稿を改めて考察せねばならない。

※本研究は、科学研究費補助金(基盤研究C「古代キリスト教思想におけるフィランスロピア」)の交付を受けて行った研究の一部である。

---

47 エウセビオス『教会史』第9巻8章においてエウセビオスは、パレスチナで生じた疫病について語りつつ、キリスト者の看病と死者の埋葬について言及し、フィラデルフィアではなく「フィランスロピア」について述べていた。